

<論文>つきしろ再考：月と憑依

平田，兼一

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

37

(開始ページ / Start Page)

39

(終了ページ / End Page)

48

(発行年 / Year)

1987-07-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019515>

あるオモロである。「ありき多」とは、船の漕行について謡ったオモロである。このオモロが、実際に船の漕行中に謡われたものか、その予祝儀礼的なものかは、この際重要でない。ただ、海を渡り歩くものの視覚が、天体へ向けられたことの可能性を想えばよい。「日本神話のひとつの特徴は、夜空の天体についての認識がきわめてとぼしい点にある。」^(註1)なかで、何故、オモロは、夜空の天体について謡うのだろうか。オモロは三日月に金真弓を見ている。信濃国佐久郡大伴神社には、祭神である月読命が、金の弓矢を投げつけて清水が湧き出した地に建てられた、という伝承がある。^(註2)月(三日月)を金の弓に喩えることは広く行われたのであろう。また、同じ伝承は、月読命は最初蒼海原を支配していたのが、竜馬に乗って、あちらこちらの山河を巡った末、この地に鎮座したとも伝えられている。長野県というと、安曇海人を思い出すが、ここにもなにか、海人たちの足跡を感じさせるものがある。

月もしくは月神を、海人たちと結びつけることは数々の伝承・民間信仰などから可能である。一般に考えられるのは、新月が船の形を想起させるとか、月と海潮の関係に古代人が気づいていたとかである。しかし、私は海を渡り歩く人々が、月に同伴的な守り神の意識を持っていたのではないかと思う。海面に映る月影にも感じるものがあったのではないだろうか。ここで考えるのは、杯に酒なり水なりを満たし、月影を映して飲みほす風習のあることである。「明けもどろの花」然とした太陽に比べ、月は形をとらえるのが容易な天体であった。姥捨山の「田毎の月」なども、月が水田に映ることである。月を水面に映しだしては、願言の対象とすることが

古代には行われていたのではないか。そしてその信仰は海人が発見し、もたらしたのではないか。あるいは、長い航海を経て、やっ

と定住した海人たちの末裔が、祖先の信仰を陸に上がった後も受け継いでいるとも考えられないだろうか。^(註3)

いま一つ考えるのは、月が航海術に関連していたのではないかという点である。それが具体的にどのようなものであったかは、まだ指摘できない。福岡県にある高良大社の祭神は月神であり、神功皇后に潮満珠と潮干珠をさづけ、水先案内をつとめたという。^(註4)おそらく、「三韓征伐」にまつわる伝承で、高良大社の月神は玄界灘を渡るために必要な航海術を心得ていたのだと思われる。それにしても、シオミツタマ・シオヒルタマとは、『古事記』にある海幸・山幸の話をおぼやせる。弟・山幸彦は、海神^{わたつみ}からもらった呪力の珠を使って、兄・海幸彦を降服させる。結果、弟は皇統を継ぎ、その系譜は神武天皇へとつながっていく。兄は隼人の始祖とされ、弟つまりは天皇家に服属を誓う。山幸彦は、海神の女である豊玉姫と結婚する。海神は、伊弉諾尊が筑紫の日向で禊をした際に生れた神であり、同じ九州宗像の阿曇氏に祀られた神である。^(註5)高良大社の祭神も、おそらく阿曇氏の奉じる神であったのだろう。海幸・山幸にみる呪力の珠も、阿曇氏がもたらしたものと思う。

大伴神社や高良大社に伝わる話などから類推して月神は元々、海人が航海のために祀っていたもので、それが海人たちの移居流離として定住とともに、内陸にも伝えられたのだと思う。しかし、本章では、月と海人との関連の可能性を示唆するにとどめておこう。

二 「月と不死」N・ネフスキー―石田英一郎批判

わが国の神話において、月に関するものは極端に少ない。天照大神の弟、三貴子の御一人、月読命ぐらいのものであるうか。その月読命にしても、三貴子の他の御二人、天照大神や須佐之男命（素戔嗚尊）に比べて、多くを語られない。その中で、ロシアの民族学者ニコライ・ネフスキーは、一九二八年（昭和三年）、『民族』誌上に「月と不死」と題した二つの論文を日本語で発表した。これは、月読命が「一般に影が薄いのは、古代記録作成者に特別の理由があつたのであらう。」と考えたネフスキー自身が、主に沖縄・宮古島で蒐集した月に関する「二三の伝説」を紹介したものだ。

ネフスキーが紹介した「二三の伝説」の中でも、特に興味深く思われるのは、「月のアカリヤザガマの話」である。お月様お天道様の言附で、アカリヤザガマは若水と死水を二つの桶に入れて地上へ降りて来た。しかし、長旅に疲れて休んだ隙に、人間に浴びせるはずの若水を、大蛇に浴びられてしまった。驚いたアカリヤザガマは、泣く泣く、残った死水を人間に浴びせて天へ戻っていった。話を聞いたお天道様は大変お怒りになって、アカリヤザガマに「桶を担いで永久に立っておれ。」と体罰を加えた。以来、アカリヤザガマはお月様の中で桶を担いで立ちはだかつて罪せられている云々。宮古島の「月のアカリヤザガマの話」は、日本列島では『竹取物語』などに残像をとどめるだけになってしまった「月と不死」の伝承をよく保っている。伊波普猷がネフスキーと直接交流があったかどうか知らないが、「昭和七年大晦日稿」の「つきしろ考」には、

「南島の事実から推して、日本民族の量り知れない大昔、日本人が国家組織をもって定住しない頃」には、「この信仰があったと見なければなりませんまい。」とある。「南島の事実」とは、琉球王朝第一尚氏の産土神（うぶすまのみかみ）で論題にもある「つきしろ」信仰のことであるう。伊波普猷とネフスキーは、それぞれ別の「南島の事実」から、日本にも月の信仰があったことを予測したのである。

折口信夫が、『万葉集』にある「月よみの持たる変若水」を解釈するにあたって、若水の信仰を中国起源の神仙思想の影響としたのに対し、ネフスキーが「好意に充ちた抗議」を行つた。（註6）ネフスキーの抗議は、「月のアカリヤザガマの話」など自から宮古島で採集した「二三の伝説」を論拠としているのだから。確かに、「月と不死」の伝承は世界的なものであり、別に日本固有でも中国起源でもなんでもない。しかし、「月と不死」の伝承がそうだからと言って、「月と若水」のそれまで世界的なものとは限らない。それに、正月に井戸から汲み上げる若水と、『万葉集』に言う「月よみの持たる変若水」とは、一応、別々に読み説いていかねばならない。前者は、「若水」の信仰として、後者は、「月と若水」の伝承として。

ネフスキーや石田英一郎によれば、月の中に水桶を担いだ人間の姿を見る伝承は、北欧やアイス、南太平洋など広大な地域、民族に散在する。これらの伝承は、月の斑点を水を運ぶ人の姿と見ている。水汲む人の多くが天秤をかついでいるとされているのは、新月からの類推であるうか。月が水汲む人などと結びつけられたのは、月を地上生命の豊饒の源である雨露の恵み手と考えていたからである。しかし、月の水汲人が持たされる水は全て、若水なのだろう

か。石田英一郎が紹介する伝承をみても、そんなことはない。スウェーデンでは、月の中の二人の老人が担いでいるのはタールの入った桶である。石田英一郎は、日本の『万葉集』や宮古島のアカリヤザガマの話こそ本質的、原始的な形態であり、北欧などの月の水汲人も古くは若水を持つ人であったろうと推測している。^(註7)しかし、どうだろうか。むしろ、アカリヤザガマや『万葉集』の「月と若水」伝承は、「月と不死」の伝承や月を雨露の恵み手とする信仰が、本来月とは別に存在していた若水の思想と、後に結びつけられた形と考えた方が無難に思う。

『おもしろさうし』では、「つき」と「すでみづ」は別々であって、「つきのすでみづ」という記述はない。

うらおそいのおやのろが節

一 佐敷苗代に

あまみやから 瞬で水

瞬で水よ

おぎやか思いに みおやせ

又もたい苗代に

(十九—二八九)

「すでみづ」は「あまみや」から来て、「田嶋も其によって、新しい力を持つのだ。」^(註8)『おもしろさうし』の原注では、「あまみやから」は「むかしから」の意とある。『混効験集』も「むかしより」としているようだ。しかし私は、「あまみや」には、ただ昔のことではない

い、遠い祖霊の地、常世という観念も含まれていたと思うのだ。『おもしろさうし』の原注が、必ずしも、その言葉の始源の意味を伝えていたとは言えない。「あまみやから」という言いまわしがあつたのを、当時(尚真王の頃か)の編纂者は、もう正確な意味がわからなくなっていて、当時は「あまみや」を昔の意として用いていたから、「あまみやから」を「むかしから」と注したのかもしれない。「あまみや」常世からの若水は、天高く月からのものへと押し上げられたのである。

三 月読の出自

杵岐・対馬には、対馬海流によって、南方の文化がもたらされる。同時に、杵岐・対馬は、大陸文化導入の門戸、大陸への海の中道でもあった。山城国・葛野坐月読神社は、この杵岐から、月読の神を勧請したものである。『日本書紀』巻第十五・顕宗天皇三年二月の記事も、この経緯を語っている。

月読命は海人が奉祝した神であるが、漁民生活にかかわりのある神であるのは勿論のこと、農民生活にも一歩踏みだしたところがある。記紀では、その多くを語られない月読命が唯一、主人公として活躍するのが、『日本書紀』神代紀一書にある保食神殺しの条である。保食神の許に到った月夜見尊は、保食神が口から「品の物」を吐き出して自分をもてなそうとしたことに腹をたて、「穢しきかな。」と保食神を剣を抜いて撃ち殺してしまふ。保食神の死体の各部位からは稲や牛馬が生じたこと、食糧の起源を説明する話となっている。この話が、神話学者A・イエンゼンの報じる南洋モルッカ諸

島のハイヌエレ神話と類似する点が多いのは、よく言われるところである。いずれも殺害されたものの体の各部から、イモや作物が生じる点で共通している。ただ、ハイヌエレ神話では、死体を切りきざんで埋めるなど、イモの株分け栽培との関連が深い。それに対して、月読の話では、稲が保食神の腹から生じたなど稲作以後の要素も入っている。南方文化の色合いが強く、イモ栽培から稲作への過渡期の姿をとどめていると言えよう。一方で、この話は、身体各部位と、そこから生じた食糧とが、朝鮮語で音韻対応している。例えば、「nun(眼)から nu(稗)が生じた。pei(腹)から pyo(稲)が生じた。」というぐあいだ。ここでも、月を仲介として、南方文化と大陸文化が結びついている。月読の神は、香岐の島で、黒潮がもたらす南方の文化と、大陸からの文化とに育まれたのである。

月は、太陽に比べ、形象化され易い。例えば、水に映す。あるいは、石に形どる。「水に映す」に関しては、第一章でふれた。先述の葛野坐月読神社には、月延石つきのいしと称する石がある。神社の由緒書によれば、神功皇后が陣痛に際して懐中に入れていた石だという。爾来、安産の神として信仰されている。それが果して、月を形どったものかどうかかわからないが、月読命を祀る神社には、霊石を置くところが多い。京都府綴喜郡田辺大住郷おおくみにも月読神社がある。折口信夫のいう「山城綴喜郡の月神」(註10)であろう。その後方、神奈備山中に坐す新神社に霊石を祀ってある。次章で詳述することになる沖繩本島佐敷の苗代宮(月代宮)にも霊石があるという。(私は行ってみたが確認できなかった。)月神を祀る神社に霊石を多く見かける

のは、月見の時の餅やイモと同じ効果なのかもしれない。「我々は、餅を供物と考えて来ていたが、実はやはり霊代であったのだ。」(註11)石や餅、イモは月を形どったと言うよりも、月の「をぎしろ」(註11)なだらう。太陽の場合、「をぎしろ」は、天高く髯籠のようなものを掲げる。月は、石や餅を捧げるだけですむ。これは、月のほうが形象化されやすいことに関係している。

月見の際、餅などと並んでイモを捧げるのは、ハイヌエレ神話と比較して興味深い。正月に、雑煮に餅を入れる所とイモを入れる所がある。稲作以前、イモを食していた記憶がいまだに私たちの脳裏には残っているものらしい。月は農耕神としての一面を持ちながら、保食神殺しのように、稲作以前からの古い伝承をとどめている。月を水に映す信仰は海人たちのものと思われるが、「田毎の月」など農耕とも関係深い。月はまた、海人たちが移居流離の生活の後、やっと定住した頃の過渡的な信仰を伝えてくれる。定住して内陸へ入った海人は、稲作以後、水田に映る月を信仰の対象とした。先に紹介した大伴神社の伝承は、海人たちの足跡を探る手掛かりとなるが、ここには、月輪石や月輪淵の言い伝えもある。「月の輪」という地名は、特殊な忌田いまだである。「月の輪田」に因んでつけられた名という。(註12)

葛野坐月読神社の月延石を、神功皇后の懐石とするのは、神功皇后が高良大社の月神の先導で玄界灘を渡ったことを思い出させる。あの月神は、潮満珠・潮干珠を持っていた。さらに、潮満珠・潮干珠は、阿曇氏を経て、海幸山幸に渡され、隼人の起源が語られる。ここでもう一つ思い出すのが、山城国のもう一つの月読神社が、綴

喜郡の大住郷おおすみに鎮座することである。大住郷は、その名の通り、そこに住む人々は、隼人の末裔とされている。私が第一章で述べた一見無関係に思われた数々のことがらが、月読を起点と終点として結びつく。葛野坐月読神社―神功皇后―潮満珠・潮干珠―海幸山幸―隼人―綴喜郡月読神社といったぐあいに。最後に、私たちは、薩摩の月神信仰に目を向けなければならない。

四 へつきしろの誕生

小野重朗によれば、薩摩半島西南部一帯には、オツドン(御月殿)と言って、田に自然石を立て御神体として月神を祀る信仰がある。(註13)小野重朗は、この信仰を、田の神などより混沌としている故に、より古層の信仰であろうとしている。より混沌としているから、より古層の信仰であるかどうかは一概に言えない。しかし、この信仰が田に祀られながらも純然たる田の神・稲作の神と言えないところが興味深い。杵岐の月読に見たような、海人の流離から定住への過渡的な信仰が、オツドンにもうかがわれるのである。『おもしろさうし』(十九―二九二)には、「月しろ」の原注として、「苗代の大や庭ニ御座有靈石之事なり」とある。薩摩のオツドンは、この苗代の靈石を思わせる。

杵岐の月読命や薩摩半島のオツドンの事実から推して、私は沖繩のへつきしろは、海人たちの移住から定住への過渡的な時期の信仰が、稲作以後も残留したものと思う。南島人が南島へたどり着いたばかりの頃の信仰と言えようか。南島人の祖先たちにとつて、元々、月を読むことは、長い移居流離のための生活の術―航海

術の類であった。後に転じて、航海の守り神、自分たち移居する海人たちの守り神となった。それが、わが南島にたどり着き、定住して農耕を開始すると、月を読むことが、農耕―農事暦と関係し始めた。長い海上での生活の際には、月の「をぎしろ」は、水に映すことであった。そのことを、彼らは、海面に映る月影にヒントを得たに違いない。後、陸へ上がり、定住を始めると、「をぎしろ」は石となった。否、陸へ上がっても、しばらくは、彼らはまだ、水に月を映していた。それが、農耕の開始とともに、田に張られた水(「すず水」か)に月を映すようになり、やがて、田の隅に自然石を置き、月の「をぎしろ」とするようになった。「あまみやからすでみづ」のオモロは、この辺の経緯を語ったのではないか。へつきしろの石のある所が「苗代の大や庭」とされるのも、純然たる稲作の神とは言えないが農耕の神であった素姓を思わせる。

南島に定住してしばらく経つと、へつきしろの由来を、海人の末裔たちは忘れかけてきた。ただ、へつきしろの信仰が、自分たちの祖先の通ってきた道を語る古い信仰だとの意識だけはあった。へつきしろは産土神うぶすながみとなったのである。へつきしろにも、こうなるべくしてなったところがあった。「これ以前に既に存在していた考へと、或る程度まで一致したので、此処に織込まれた」(ネフスキー)のである。月は、航海術の神・海人たちの守り神となっていた。定住した後も、南島人には、自分たちの祖先である海人の守り神であった記憶が残っていた。へつきしろが軍神へ昇格されるのも、元々は月が不死の存在とされた古代信仰に由来し、それが自分たちの守り神だった故に違いない。移居流離↓定住↓稲作開始と

なるにつれて、南島の体制が整えられて、へつきしろの性格は体制の維持に必要な神へと変貌させられていった。

うらおそいのおやのろが節

一苗代の庭に

月代は 手摩て

月代す

成さい人思い

守りよわめ

又今日の良かる日に

(十九—一二九二)

へつきしろのオモロに、「月代す 成さい人思い 守りよわめ」の言葉が見えるのは、へつきしろが守り神であったからだ。それでも、南島にへつきしろの信仰が曲がりなりにも残ったのは、偏に、彼らが海洋民であったからだ。また、南島人は、自分たちが、海人の末裔であることに気がつき、自負していた。逆に、日本列島では、海人が主権を握ることは遂になかった。天照大神などに海人の信仰が投影されていたのかもしれない。

一方、月読命には、あまりにもリアルに海人たちの信仰が投影されていた。拭おうにも月読命から、海人の影をとるのは不可能であった。しかし、海人たちの存在を無視するわけにはいかない。航海術などを通して、彼らは亀卜に通じていた。神話の霊的完成と宣伝に、海人集団の存在は欠かせない。因って、記紀において、月読命

は、その性格の大部分を奪われ、骨抜きにされ、当たり障りのない姿となった。月読命は、海人の末裔たちが流布した民間信仰にのみ生きる存在となったのである。しかし、篡奪を受けた月読命の怒りが心頭に達したのが、顕宗天皇三年二月の条である。ここで、月神は事代に憑依し、自分を祀ることを告げさせた。これが、大和朝廷内での、海人たちのなにかの動きを伝えるもので、大和側と海人とのなんらかの政治的な駆け引きの結果が反映されているかどうかはわからない。月読命が「一般に影が薄」く、「古代記録作成者」にあった「特別の理由」とは、以上のようなことと推測する。

五 月と憑依

益田勝実が、「伊波普猷の「つきしろ考」を継承発展させて、へつきしろを司祭者であり、自分たちへつきしろの神格化であるへつきしろの神を職能神として月を祀っていたものとしたのは、卓見である。これ、『おもろさうし』にあるへつきしろに関する五首（うち一首は重複）のオモロの意味がよくわかるようになった。

あおりやへが節

一聞得大君ぎや

赤の鎧 召しよわちへ

刀うちい

大國 鳴響みよわれ

又鳴響む精高子が

又月しろは さだけて
又物知りはさだけて

(一一五)

このオモロで、「月しろ」と「物しり」(巫覡)が対語となつてゐるのも「なるほど」と納得できる。しかし、まだ、釈然としないところがある。(十九―一二九二)のオモロの原注には、へつきしろが苗代の大や庭にある靈石となつてゐるのだ。(第二章で触れたように、『おもろさうし』の原注が、正しくその意味を伝えてゐるとは限らないのだが。)果して、へつきしろとは、石のことなのか、司祭者のことなのか。ここで、月がどのように憑依するのかを考えたい。

今まで、月を祀るのは、そもそも、海人たちの信仰であつたと説いてきた。そして、月を水面に映すことが、月を招くそもその形であつたとも。水に映つた月を飲みほし腹におさめることで、飲んだものに月が憑依するのである。元々は、斯くのごとく、視覚的にわかりやすい方法で、月との憑依が示されたと思う。一度、水に月を寄せて形としてとらえておいて、水面に映つた月、手にとらえた月を、再び人間に乗り移らせる。松前健は、「中央ヨーロッパでは、もし女が、月影の映つてゐる井戸や泉の水を飲んだなら、妊娠すると信じられてゐる。」と報じてゐる。(註15)月影の映つてゐる水を飲むことが、月を人間に憑依させると信じられていたことが、この事実でもわかる。一度、天上の月を杯に張つた水なり酒なりに降ろしておいて、さらにその水を飲むことで、人間に月を憑ける。天上の

月を降ろすには二段階の方法がとられた。この方法を思いついたのは、海人たちであろう。航海の際、夜、月が海面に影を落とすのを見て天空にある月が自分たちの手に届くところにあるのを知り、驚き、月に太陽にはない親近感を持つようになった。やがて、海人たちが陸へ上がり定住して、農耕をはじめると、石に月を降ろすようになった。石は、靈魂の出で入るものとされていたらしい。古代、死者に石を抱かせて埋葬してゐた風習から考えると、石は靈魂を封じ込める力があると信じられていた。「天岩船」などという言葉も、本当に岩で造つた船などあるはずもなく、天も岩も船にかかる美称である。古代人は、石や岩に靈的なものを感じてゐたのではないだらうか。『おもろさうし』には、「月代は 手摩て」という言葉がある。靈石を前に巫覡がなにごとかを唱えて手を摩つて、石に寄りついた月を、さらに自分へ取り付かせる光景が浮かんでくる。

くだかあつめなにくせきよらがけおのうちが節

一知念杜ぐすく

月代は 手摩て

成さい人が

いきよいど 待ち居る

又大国杜ぐすく

(十九―一三〇八)

「知念杜ぐすく」で、靈石を前に必死で、巫覡が降靈術を行つてゐる。守護神である月神を降ろして、自分に憑依させ、知念の按司へ

の言祝ぎの儀式を行おうとしているのだ。ぜひ、言祝ぎを無事に終らせて、靈的に守られた存在であることを領民に示さねばならないと、神妙な顔つきの按司の姿も見える。(十九—一二九二)や(十九—一三〇八)のオモロは、巫覡による降靈・憑依と言祝ぎが無事に行われることを予祝するオモロと読める。

月は一旦、「をぎしろ」である靈石を目標に降りて来る。そして次に、靈石から「よりしろ」である人間に憑依するのである。月影を水に映して飲むのも、月を「をぎしろ」である水に映し(月の視点から言えば、水を目標に降下する。)それを「よりしろ」である人間が飲んで憑依する。月から人間にダイレクトには憑依しない。一度、何か媒介、天から天降りする目標を必要とする。沖繩で言うところの「おとおし」の觀念に近いものがある。靈石へつきしろは、「おとおし」の香爐のような作用をするのである。「よりしろ」である巫覡から見れば、靈石の彼方に遠処の月を感じているのだ。

太陽で言えば髻籠にあたるのが、月の靈石である。「明けもどろの花」として形の捕まえにくい太陽は、天高く掲げられた髻籠を「神案内の目標」とした。しかし、夜になれば目にはっきりと形がわかり、しかも、水面に映すことで手に取ることができる月には、太陽の様に「神案内の目標」を高く掲げる必要もなかった。地上近くに、ただ降りて来る目標を置けばよかったのである。それには、靈性のあると信じられていた石や餅が用いられた。石や餅の形が月を思わせるように丸いのは、二次的なもので、それほど重要なことではないかもしれない。だいたい、月信仰は海人たちが海面に

映る月を信仰したのが始まりだから、後になっても、月を招くものを天高く掲げようなどと、思いもよらなかつたに違いない。

まず、「へつきしろ」とは、月の「をぎしろ」、月が天降りする目標物である靈石のことであった。次に、その前で祈りをささげ、月を自分に憑依せしめる「よりしろ」の巫覡のこととなった。以上のことを、『おもろさうし』に具体的に見てみよう。「第十九 ちゑねんさしきはなぐすく おもろ御さうし」は「地方おもろ」に分類される。「首里王府の息のかからない、沖繩古代の世界観、宗教観を知るのに、地方おもろは欠かせないものである。」(十九—一二九二・一三〇八)のオモロには、「月代は 手摩て」つまり「月代を 祈つて」の意をあらわす言葉がある。この「月代」が、靈石「をぎしろ」のこととわかる。(十九—一二九二)の原注は正しかったのだ。「地方おもろ」は、主に部落時代・按司時代のものを対象としているから、(註15)へつきしろの意味は、按司時代には、靈石のほうに重点を置かれていたと思われる。それが、「第一 首里王府の御さうし」に収録された(一一五)のオモロになると、「大國 鳴響みよわれ」などと琉球国王、国家護持のためのオモロであり、「月しろ」は「物しり」の対語、巫覡「よりしろ」のことである。へつきしろを示すものが、「をぎしろ」である靈石から「よりしろ」である巫覡に重点をおかれるようになったのは、首里王府の中央集権化と並行してであった。

海人の記憶があった頃、つまり「第十九」に収録されている二首のオモロが謡われていた頃、そしておそらく、第一尚氏の頃まではまだ「よりしろ」たる巫覡はそれほど専門的なものではなかつた。

首里王府の体制が整えられていくにつれて、宗教機構も集権化・職制化され、へつきしろの役は専門司祭に委ねられるようになっていった。この辺の経緯は、益田勝実の説に近い。ただ私は、海人の信仰や南島の「おとおし」の観念から推察して、月神が「よりしろ」である巫覡に憑依するためには、「をぎしろ」を一旦通る必要があったと考えたのである。(十九―一三〇八)のオモロに見られる「月代」は、「月白」つまり光り輝く月の美称とする説もある。今まで述べてきたように、月を拝するには、一度、靈石に月を降ろす必要があった。遠い所にある神を遙拝するには、巫覡の他に、「神案内の目標」として石なり香爐なりがいるという考えの土台があった。少なくとも、このオモロが謡われていたと思われる按司時代には。因って、この「月代」も靈石の意でよいと思う。

へつきしろの儀式は、第一尚氏の頃まで佐敷・苗代宮で行われていた。巫覡が、靈石の前で真剣に祈りをささげ、やがて、神憑りの状態となり、言祝ぎを行ったのだろう。第二尚氏になると、伊波普猷が言うように、「兵船を繰出すに先だち(首里の)聞得大君御殿」で行われるようになったのだろう。その頃は、形式化・祭式化されていて、靈石もなく、神女が神憑りのふりをして、兵士の戦意高揚のために戦勝予祝をする、壮行会に近い存在になっていたと思う。既に、へつきしろの名称は、軍神を奉じる専門司祭のものとして定着していた。月神を招き降ろすには靈石が必要であること、その靈石がそもそもへつきしろであったことも忘れ去られていたのかもしれない。

註

- 1 上田正昭『日本神話』一〇一頁
- 2 松前健「月と水」 日本民俗文化体系2『太陽と月』第二章 一四六頁
- 3 折口信夫「国文学の発生(第四稿)」『折口信夫全集』第一卷 一七七頁を見よ
- 4 松前健 前掲論文 一四七頁
- 5 西郷信綱『古事記の世界』一六四頁
- 6 折口信夫「若水の話」『折口信夫全集』第二卷 一一七頁
- 7 石田英一郎「月と不死」
- 8 折口信夫「若水の話」一三〇頁
- 9 大野晋『日本語の成立』日本語の世界1
- 10 『日本の神々』5「山城・近江」による
- 11 折口信夫「国文学の発生(第三稿)」『折口信夫全集』第一卷 二八頁
- 12 松前健 前掲論文 一五六頁
- 13 小野重朗「民俗にみる隼人像」日本古代文化の探究『隼人』
- 14 益田勝実『火山列島の思想』
- 15 松前健 前掲論文 一五六頁
- 16、17 外間守善「おもしろ概説」日本思想大系『おもしろさうし』

本文中のオモロは、全て日本思想大系18『おもしろさうし』による。

『折 信夫全集』は中公文庫版によった。(一九八七年三月卒業)